49. NYC 研修旅行

SGH　　NYC 研修旅行を実施しました

3 月 4 日（日）~11 日（日）、本校初の取り組みとして GL コース 2 年生全生徒 38 名と引率教員 3 名でアメリカ・ニューヨーク研修旅行を実施しました。

本校では昨年度まで修学旅行として実施してきたものを、SGH のテーマに沿ってより研修の色合いを強めたプログラムを構築することを目指して研修旅行としました。テーマ設定も、世界の課題となっている問題の理解を深め、同時に世界平和への希求・貢献意識の育成を図るものに変更しました。また、グローバルリーダシップの育成、異文化や異環境下でのコミュニケーション能力の育成などを意識するとともに、本校 SGH 課題研究主題である貧困や防災に沿った研修とし、研修で体験や学習したことについて課題認識を高め、アウトプット活動していくことを視野に入れています。

上記コンセプトをもとに、今年度は研修テーマを「移民」「平和活動」「世界経済」「海外で働くこと」とし、ニューヨークを肌で感じ、貧困問題、教育問題をはじめ、SDGs が掲げる問題の解決策を多角的に考えられるよう実施しました。

1 日目

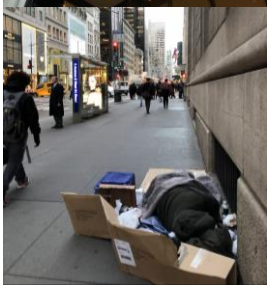
ほぼ移動のみの一日でしたが、全員元気にジョン・F・ケネディ空港に到着しました。これから一週間にわたる研修の滞在先である Walcott Hotel は、エンパイアステートビルを目前に見上げる、マンハッタン島のミッドタウンにあります。1904 年に開業の老舗ホテルで、建物は歴史的建造物として保存されていて、小さいながらロビーの装飾はすばらしく、いきなりアメリカの歴史に抱かれたように生徒たちは感じたようです。ホテル到着後は、翌日に向けたミーティングを開きました。

2 日目

まず、エレノア・ルーズベルト高校（Eleanor Roosevelt High School）を訪問しました。同校は 2002 年開校の新しい学校で、一学年 125 名の小さな学校です。すべての授業をアクティブラーニングで行い、生徒が自らの意見をはっきり述べられるコミュニケーションスキルを伸ばすことに成

功し、約 6000 名の受験生を集めています。本校生徒を 5 グループに分け、それぞれが 6 クラスを体験しました。あるクラスでは、ガンに対してメディアが作り出すイメージとそれによって社会にどのような影響を与えたかを論議していました。美術の授業では作品の鑑賞が行われており、それぞれの生徒が作品の特徴や作品の持つ意味、作者の深層心理について考えを発表し、意見交換をしていました。英文学の授業では、作品全体の鑑賞の後、導入部分の果たす役割について論議されていました。彼らはこの後、自分で作品を書くそうで、自分の作品に読んだ作品の導入の手法を取り入れて作るという課題が出ているためか、真剣に分析をしていました。その他、スペイン語やフランス語の授業があり、米国における第 2 言語教育を、自分たちの英語学習と対比して見ることができました。これらの授業では、成績優秀な生徒が TA のような働きをしていることが印象的でした。

午後からは、The Metropolitan Museum of Art（MET）を訪問しました。MET は 1870 年に、市民が優れた美術品に触れられるようにと、28 人の民間人グループによって創立されました。今でも基本的な運営は民営で、方針も変わっていないそうです。ヨーロッパ絵画ではエル・グレコ、フェルメール、セザンヌ、ゴーギャン、ルノワール、モネ、ロートレック、ゴッホなど名前をあげればきりが無いほどの作家の名作が展示されています。エジプト美術も、アスワンダムによる水没の危機を救う形で移設されたデンドゥール神殿は、ガラス張りの展示室にあり、神殿に刻まれた象形文字に元あったときと同じように朝日が当たるように工夫されていることに驚きました。本物の美術に接し、多くの生徒が本物の持つ力を感じたようです。

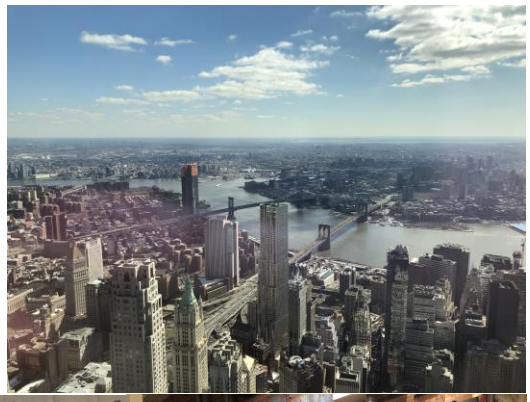


その後、セントラルパークから 5th アベニューを散策し、屋外スケートリンクやトランプタワー、ロックフェラーセンターなど、今のニューヨークを観て、本日の行程を終えました。途中、物乞いの男性、路上に段ボールにくるまり寝ている男性などとも遭遇し,この街の持つ歪みについても感じ取ることができたようでした。また、ガイドさんのお話で、トランプ政権になってから平気で差別を口にする人が増え、差別が落書きにされているのを観るようになり、危機感を持つグループと熱烈的なトランプ支持層との間に大きな断層があることもお聞きしました。それでも、ニューヨーク市の努力により、安全な街作りが行われてきており、イギリスのエコノミスト誌発表の世界の安全な都市ランキングでは、ニューヨークが 21 位に入っています。別の調査では 10 位以内という例もあるそうですが、自ら歩いて感じた印象は、怖いと感ずることがなかったというもの

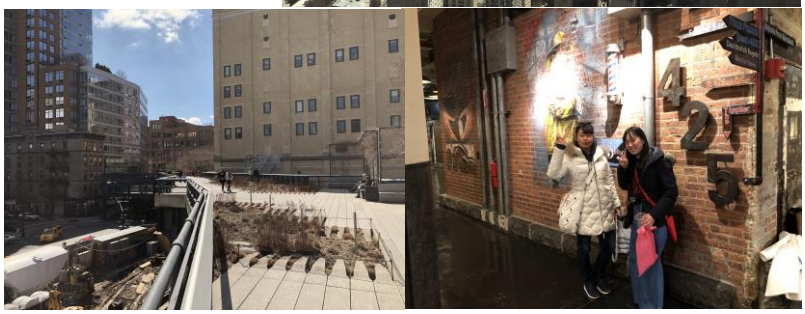
で、昔からのステレオタイプの怖い街ではなくなってきていることを、生徒全員が実感したようでした。

3日目

この日、まず訪問したのは、ウォール・ストリートにあるニューヨーク証券取引所です。世界経済に最も大きな影響を与える証券取引所として知られています。ブラックマンデイ（1987年10月19日月曜日）にニューヨーク証券取引所を発端に起こった史上最大規模の世界的株価大暴落）があまりにも有名ですが、それ以降も、様々な株価変動のきっかけとなることを学びながら、外観を見学しました。ウォール・ストリートは、もともとインディアンやイギリスからの攻撃を防ぐ防護壁が材木で作られた場所であるために、そのように呼ばれるようになったそうです。その後、通り沿いに材木の取引所ができ、徐々に発展していったそうですが、世界経済の中心なのに、思いの外、通りが狭いことに生徒たちは驚いていました。



次に訪れたのは、1ワールドトレードセンター（アメリカ独立の年にちなみ1,776フィート（約541m））です。2001年9月11日の9・11テロ（アメリカ同時多発テロ事件）によって崩壊して以降、メモリアルとしての整備か再開発か、大きな議論がなされてきたことを知りました。結果として、現在の形に落ち着いたようです。最上階からの眺めはニューヨークの全貌を俯瞰できましたが、テロの攻撃に遭ったときにビルにいた人々がどのような心理状態であったかを思うと、複雑な心境でした。



次にハイラインと呼ばれる、全長2.3kmのニューヨークセントラル鉄道ウエストサイド線の廃線跡を利用して作られた遊歩道公園を訪れました。この鉄道は、ビルの中を通る部

分やビルに直接隣接する部分があり、貨物を建物から直接出入りさせることができるような構造が特徴的だったようです。これらの部分は公園にうまく取り入れられており、公園開設以降犯罪が減り、地域の地価も大幅に上昇したとのことです。ニューヨーク市の公園管理予算平均の数倍の予算を投入していることからも、このハイラインへの期待がうかがい知れます。次に、ハイラインに接するチェルシーマーケットを訪れました。屋内型マーケットの草分けといわれますが、元はナビスコのビスケット工場であったそうです。多くの店舗が軒を連ね、賑わいを見せていました。ここで、昼食を各自とり、次の目的地、ニューヨーク国連本部に向かいました。

ニューヨーク国連本部ビルは、事務局ビルと理事会議場ビル、総会議場ビルからなり、理事会議場ビルには、安全保障理事会、信託統治理事会（今は停止）、経済社会理事会の三つの議場があります。今回は、総会議場ビルと、理事会議場ビルを見学できました。ニュースなどでおなじみの議場ですが、雲の上のような場所であった所に足を踏み入れることができ、これまで以上に国連のニュースが身近なものとしてとらえることができるようになると思います。事務局ビルと総会議場ビルの間には、日本から寄贈された平和の鐘が置かれていました。これは、60 か国の子供たちが集めた硬貨から鋳造されたものです。また、年に 2 回、春分の日と 9 月の総会開幕日に、この鐘を鳴らすのが慣例となっていることを聞きました。国連内では、SDGs についての広報がいたる所にあり、案内の職員の方からも SDGs についてお話を聞きました。2001 年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2016 年から 2030 年までの国際目標であり、これを軸にして、様々な国際問題が論議されていることを改めて認識しました。

夜間には、オプションとしてブロードウェイショウのアラジンを観劇しました。なぜ、ブロードウェイショウがここまで人気を保ち続けているのかの答えが、ここにありました。キャストのすばらしさはもとより、シアターの雰囲気等や本物の持つ力を堪能しました。

4 日目

大雪の予報により、教育機関が閉鎖されることとなり、午前中訪れる予定であったフェリシアン大学訪問を 5 日目に延期し、午前はブルックリン地区を訪問しました。

この地域はアメリカの中でも最も歴史を持つ地域ですが、現在ではニューヨークの代表的なベッドタウンでもあります。ブルックリン橋を望む公園でブルックリン橋を望んだ後、ある小さなショップ「Package Free」を訪れました。ここを訪れた理由は、授業でその内容について学んできた、ローレン・シンガー（Lauren Singer）さんの「Why I live a zero waste life」という TED Talk での Talk

https://www.youtube.com/watch?v=pF72px2R3Hg

を知ったことにあります。Zero Waste のコンセプトをもとに開発された商品を実際に見てみたいと思い、そのお店を訪問しました。お店には、実用を考えられた洗練されたデザインの家庭用品、赤ちゃん用品などが並んでおり、自分の思いを形にするシンガーさんの生き方に、共感を覚えました。

午後からは、マンハッタンに戻り、グランドセントラル駅内昼食をとりました。駅構内のホールの広さと装飾のすばらしさに感動しました。その後、SOHO 地区のブロードウェイ沿いにあるユニクロのグローバル旗艦店事務所を訪れ、サステナビリティー広報部長の Ms.Becky Hall さんより、お話を伺いました。途中 CEO の Mr. Hiroshi Taki にもお入り頂くことができました。世界第 3 位となったユニクロがニューヨークで苦戦しながらも、サステナビリティーの取り組みで評価を受けていること、サステナビリティーやワークライフバランスを前面に打ち出さなければ一流企業といえないという同社の考えをお聴きすることができました。例えば、一枚のシャツを作るために 2700L もの水が必要であり、企業は環境問題を避けて通れないということです。燃料や電力使用の削減は収益にもつながり、自然環境の保全こそが、持続可能な成長を目指す基盤となるとのことでした。また、ワークライフバランスは、病気欠勤の減少や安全性の向上、信頼関係の構築に重要といいます。世界的な企業に発展したユニクロのコンセプトは、生徒たちにとって SDGs をより現実の社会にあてはめる大きなヒントとなったようでした。

夕食は、マジソンスクエアガーデン前の Penn Plaza で各自自由にとり、宿舎に戻りまし

た。

5 日目

昨日の大雪が嘘のように天気に恵まれたこの日、最初にハーレム地区を車窓より探訪し、その後、フェリシアン大学と世界銀行（The World Bank）を訪問しました。夜にはジャーナリストの津山恵子さんにお話を伺いました。

ハーレム地区は、ジャズやソウル、ヒップポップ等、多様な文化を生み出して来た地域です。一時期低所得者層が集まる街として治安が悪化した時期もありますが、現在では安定しているようです。有名なアポロシアター、映画の撮影でよく使われる“入り口が階段”になっているアパートメントなどの街並みを見ることができました。途中、テレビドラマの撮影で、70 年代の警察署を再現している場面にも遭遇しました。

フェリシアン大学は、ニュージャージー州ラザフォード（Rutherford）にある大学です。ニューヨークまで鉄道でも 30 分という距離にあり、国連との Fellowship プログラムを持つ数少ない大学のうちの一つです。2300 人の学生に 55 専攻という小さな大学ですが、利便性とユニークなプログラムで人気の高い大学です。ここでは、3 名の大学生から大学での活動の紹介、国連の活動についての紹介、パナマ出身の国際部部長の Yaruby さんから大学のプログラムについてお話を伺いました。その中で、特に SDGs の取り組みへの課題、特にまだ一部の認識にしかなっていない SDGs の重要性を広げなければならないことについてのお話が、生徒たちの印象に残ったようです。

次の訪問地は、世界銀行でした。国連の専門機関の一つで、中所得国および信用力のある低所得国の政府への貸出や、最貧国の政府に無利子の融資や贈与を提供しています。また、関連機関（世界銀行グループ）が民間企業や政府への助言サービス業務を通じて、途上国の持続可能な成長を支援したり、途上国に対する外国直接投資を促進すべく、投資家や貸し手に政治リスク保険を提供したり、国際投資紛争の調停と仲裁を行う場を提供したりと多岐に渉る活動を行っています。日本も戦後復興期に、高速道路建設や東海道新幹線の建設に融資を受けていました。現在では日本は出資額第 2 位となっており、国連総会と異なり、出資額によって意思決定の投票数が変わることが特徴で､保有する世界銀行株 1 株につき 1 票の投票権を持つそうです。もっとも票数が多いのはアメリカ合衆国、次いで日本、以下、中国、ドイツ、イギリス、

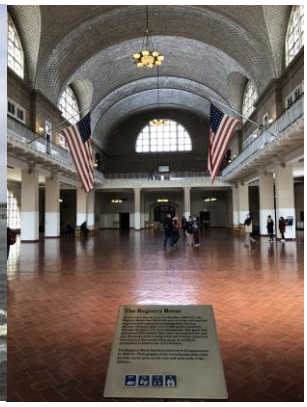
フランスの順となっているとのことでした。世界銀行への加盟国は国連加盟国の 193 カ国より少なく 189 カ国であることや、どのようにして融資国の信用を調査しているのかなどの質問が生徒から投げかけられました。加盟は、IMF の加盟国であることが原則で、加盟申請後に世界銀行によって審査が行われるそうです。また、国連の SDGs に連動して、貧困の撲滅や気候変動対策などへの投資を強化していることなどを知ることができ、国際社会における世界銀行の役割について理解を深めることができました。

夕方には、宿舎近くのレストランで、ニューヨーク在住の日本人ジャーナリスト津山恵子さんとの懇談を行いました。190 カ国の人がいるニューヨークでどのような暮らしをしているのか、なぜ共同通信をやめてニューヨークでフリーの活動を始めたのかなどをお話し頂いた後、生徒からの質問に答える形で 1 時間以上の懇談になりました。独立当時の苦労については、自分の履歴書を各社に送り、あらゆる人脈を使って紹介してもらうなど、仕事をもらうために努力したそうです。facebook 創設者のマーク・ザッカーバーグ、パキスタンの人道活動家マララ・ユスフザイなど、数多くの有名人のインタビューをされる時、どのような準備と工夫をされているのかに対し、事前の準備の大切さを強調されました。インタビューする方のありとあらゆる記事や本を読み、今までされたことがない質問を考え、準備を完璧にすれば怖いものはなくなると話されていました。有名人のインタビューは 20 分限定など短い時間に限られ、かつ、複数社同時というのが多いため、短い時間に的確に質問できるように、質問を何度も声に出して練習し、他の記者と声がかぶっても前に出る決意で臨んでいるとも話されました。また、ぶら下がり取材ができるように、本人に近い所に座り、自分しか持っていない情報をそのときにぶつけるなど、興味深いお話を聞くことができました。マララさんとのインタビューでは、「今のあなたのゴールは？」という津山さんの問いにマララさんは「成績でオール 5 をとること」と答えたそうです。「すべての子供に教育を」と主張している自分が、良い成績を取らなければ意味が無いということでした。そしてまた、「正当な形で自分の国の閣僚になりたい」と言われたマララさんの決意に感心したそうです。

「偏りのない記事を書くために心がけていることは？」との生徒からの質問には、異なる立場の人の意見を平等に聞いた上で記事にするが、例えば、差別について両論を書いても、行間から差別はだめというメッセージを読み取れるような記事を書くこと、というお答えを頂きました。トランプ政権になってからは、差別が顕在化してきていることに心を痛め、11 月の中間選挙に注目しているとのことです。その他、差別・区別のない気持ちを持つこと、自分と立場の違う人を理解できることが大事など、生徒たちに多くのメッセージを頂きました。津山さんのお人柄とその努力に生徒たちは大きく触発されました。懇談

後の夕食会にも同席頂き、多くの時間を費やして頂きました。

6 日目



いよいよ現地での研修の最終日です。まずは、自由の女神像を船から見学した後、Ellis（エリス）島の移民博物館を訪問しました。その後、希望者は、National September 11 Memorial Museum（9･11 博物館）に入館しました。

自由の女神像とエリス島への船へは、国際線の飛行機に乗るほどのセキュリティチェックがあり、出航後も沿岸警備の船が併走するなど、緊張感の高まるアプローチとなりました。エリス島の移民博物館では、当時の入国審査の様子や移民の数の推移などについて学ぶことができました。希望に満ちてアメリカに渡ってきた人たちの中に、病気などの理由で本国に送還された人たちの悲しい歴史もあることを知りました。

9･11 博物館では、同時多発テロの詳細、傷ついた地下構造、飛行機が突入した階のゆがんだ鉄骨、象徴となった十字架状の鉄骨、突入した飛行機の残骸の一部、崩落によって壊れた消防車、犠牲者のお名前と写真、遺品、犠牲者が残した最後の言葉などが展示されていました。多くの訪問者がおり、苦痛に満ちた表情の方、知人を探すかのように犠牲者の写真やリストを探す方、祈りを捧げる方などに遭遇し、この場の意味を改めて感じることができました。そして、このようなことが繰り返されないように、憎しみの連鎖では何も解決しないことを知り、どうすればこのようなことが起こらない世界を作れるのかを真剣に考え始めるきっかけを与えてくれる場所だったという生徒もいました。

この研修の様々な経験を通して、生徒たちはニューヨークが世界を代表する都市であり続けることの理由がわかり、ニュース上の出来事が現実に引き寄せられたように感じたようでした。何かに危機感を持った人が解決に立ち上がることで実現していることがあることを知った、という生徒がいました。様々な方との交流の中で、Talking ではなくコミュニケーションが大事と知った生徒もいました。一方で、アメリカが掲げる自由の裏で、自由にできなかった人たちの苦悩もあることに気がついた生徒もいました。様々な視点から様々な刺激を受け、世界がどのような方向に向かおうとしているのかについての示唆も多く受け、今後の課題解決に向けて、さらに深く考えることができるようになったのではないかと思います。